コラム

新しさの魅力と魔力

2005.12 月

11 月下旬と 12 月上旬に広島県と栃木県で小１女児，そして，京都府の学習塾で小６女児の尊い命が奪われた。小１女児は不審者に殺害され，無残な姿で発見された。小６女児は，学習塾の教師(と呼びたくないが)に計画的に惨殺された。今は，ただただこの子どもたちの冥福を祈り，再三叫ばれている類似事件の絶無を願うばかりである。

新しいという言葉に非常にひかれることがある。新車や新製品と言われると，カタログや広告などの写真や説明についつい目が行く。そして，それまでのものと細部まで比較する自分がいる。キャッチコピーも手伝って，「これまで，ここはこうだったけど，今度はこうなっているので，凄い。」と，その品物のよさを自分なりに解釈してしまう。時には，購買意欲を高め，即買行動に転ずることもある。

それは，新しいという言葉の裏にある「よさ，価値，改善，便利など」のプラスイメージが経験から獲得されているからである。勿論，マイナスイメージがないわけではないが，一般的には前者が多い。これまでのものは使えるけれど，もっといいはずだからと思い切って買い換えるということがある。

教育界でいう新しさはどうだろうか。「新しい学力観」「新しい時代を切り拓く」「新しい見方や考え方」といろいろあった。そして，最近では「新しい義務教育」という言葉が登場した。その時々の情勢により，「新しい」という言葉に託した諸先輩の熱いと思いは分かるが，ふと教育界の新しさには，果たして先に言った「よさ，価値，改善，便利など」があるのだろうか。何かいいことがあると考えたい。しかし，そう考えるのは早計である。元々，新しいと言う言葉にプラスイメージをもつこと自体おかしいことなのかもしれない。新しい学力観が良くて，それまでの学力観は古くて良くないという構図が，あの時なかったか。我々は，新しさという言葉の魅力と魔力にあまりにも幻惑されているのではないかと自覚する必要があると思う。

教育界においては，新しいという言葉が出た時には，一度はこれからに変換して考えた方が分かりやすいと思う。「新しい義務教育」は，これからの義務教育ととらえた方が理解しやすい。とは言え，「新しい時代の義務教育を創造する」（中教審答申平成 17 年 10 月 26 日）の中身を読むのが先決である。

（芝）